

## 足元から平和をつくる

樋口さやか (日本YWCA副会長)

私の母校、西南学院中学校は私が生徒だった当時、毎年夏に希望者向けに広島への学校独自の学習旅行を実施していました。2003年、中学3年生の夏は、日本YWCA主催の「ひろしまを考える旅」へ合流する形で参加することになりました。「ひろしまを考える旅」のフィールドワークで呉市を訪問し、これから戦争が起きている場所に行くかもしれない潜水艦や護衛艦を目の当たりにし、戦争というのは過去の話ではなく、今も続いているのだということ、そして、私が住む日本もその戦争につながっているのだということを実感させられてしまいました。そこでの学びを何かの行動にすぐに移すということは、その時の私にはできませんでしたが、私の心の中に鮮明な記憶として残る体験でした。

2007年、東京の大学に進学をした私は、今何か、改めて平和を創り出す働きに関わりたいと思いました。その時に思い出したのが、4年前に参加をした「ひろしまを考える旅」でした。2007年にはインターンとして、その後2008年から2013年、2018年から現在までプログラムの実施、運営にあたる「ひろしまを考える旅」の委員の一員として活動を続けてきました。「ひろしまを考える旅」を通して、これまで私は多くの被爆者や、核をなくすために行動をしている人たちに出会うことができました。また、私はこの旅の影響もあり、平和教育の分野に興味を持ち、大学と大学院の修士課程で、平和教育をテーマに研究を行いました。それら旅や大学での経験や学びから、私は平和を創り出すためには、日々の営みがいかに大切であるかということを考えるようになりました。戦争は突然にはやってきません。私たち、一人ひとりが、自分を大切に、そして、社会の問題にきちんと向き合うことを努力して継続していく、そんな不断の努力の積み重ねによってこそ実現されるのが平和なのだと思います。

そんな考えを象徴する私の幼少期の出来事を最後に紹介します。これは、私自身の記憶には全くなく、のちに母がよく私に聞かせてくれました。私が三歳の頃、湾岸戦争の被害を報道する報道を見ながら、三歳の私が「ブッシュが悪い！」とテレビに向かって糾弾するように言ったそうです。母曰く、家庭では、湾岸戦争についての話はしたことがなく、私はあくまでも、「人の持ち物を勝手に壊してはいけません」という保育

園の先生の教えに基づいて、人が住んでいる家や街を勝手に壊している戦争を始めた人であるブッシュ元米大統領を批判したのだということです。三歳児がそこまでの思考をすることができたのか、甚だ疑問であり、私は両親が話していたことを、ただ、真似をしただけではないかと思っております。ただ、一方で、私の母が言うように、「人のものを勝手に壊してはいけない」「人の体や心を傷つけてはいけない」と言う、子どもたちが保育園で学ぶ原理を、大人たちが守らないから起きているのが戦争なのだと思います。為政者たちには、その原理を思い出して欲しいですし、一方で、市民である私たちは、そのような原理が権力者たちに守られていないという状況に対して、いつもアンテナをはり、少しでも破られそうな動きがあった際にはそれに対して反対の声をあげることが必要なのだと思います。

平和とは、本当にもろくはかないものでもあります。しかし、その一方で、本来は地球に住む私たち一人ひとりがお互いを尊重さえすれば、実現することだと思います。それを実現するために、私はこれからも自分の足元から行動をしていければと思います。